

## 「デジタル茶人、渡名喜元俊の hp」

金城 満

三年が経とうとしています。54歳、突然でした。元俊さんについての記憶はあるのですが、記録がありません。亡くなった今も元俊さんのホームページ (hp) が存在しています。hp は確かに記録です。しかし、点滅した暗号を、距離をおき解読している様な気分です。

元俊さんの hp には「MEMO」として日々の出来事やコメントが綴られています。それがあつては知っていましたが、その内、読もうとそのままです。

先日、あることを検索していたら偶然ヒット。読み始めたら、三日かかりました。遺書の感じと、小説を読んでいる感じが混ざり合い、現実と妄想の間の気分が続いていました。

hp では通常、記事は新しいのが上段にあります。従つて「MEMO」も上段が更新最終日のものになります。

この最終日の「MEMO」が、「ドスンッ」とききました。しかし普通にココだけ読んでも意味が分からないはず。私もそうでしたから・・・。「MEMO」の初日にさかのぼつて、下からここまで読み進めると、「ドスンッ」なのです。

このGVからの原稿依頼は、かなり難しいと感じていました。評論づつてうんちくするの鼻につくし、友人ぶつて悲しむのも歯が浮くし、後輩ぶつて褒め称えるのも耳がかゆい。

全てが元俊さんには不似合いなのです。しかし、逆に最もそれを望んでいた人だったかもしれません。

元俊さんは常に両極端を、行き来していた感じがします。難解な本を薦めてくれたかと思うと、簡単に運転免許証の更新を逃してしまう。そんな人だったので、理解が拡散して書けない感じなのです。むしろ書かれる事で、囲い込まれたくない人だったのではないのでしょうか。

そこで直接、渡名喜元俊 hp を見てもらう事で、「亡き元俊」を知っていただきたいと試みました。天国の元俊さんには無断転載の許しを念じ、立上げから最期までの三年間を、hp の並びとは逆に時系列で紹介します。抜粋した私の「囲い」はお許し下さい。

以下、渡名喜元俊 hp より抜粋

2000/07/16 やつとホームページが、まがりなりにも出来た、と、思います・・・それと、ボク自身の備忘録と勉強のためです。アートに関してはちょっとマジかなア。

2000/12/01 21世紀はもう直ぐだ。師走の風は冷たく、光は早い。街もそわそわ喧噪の直中だ。

2000/12/10 オノ・ヨーコ・・・彼女については誤解していた。

2001/02/07 アートを専業にすることは難しい。やつと、その事がわかつた。

2001/05/20 人生訓 001 セレクトが大切です

2001/06/07 時代を映す鏡は端的には2つあります。一つ

が「アート」で、他の1つが「犯罪」です。

2001/06/12 たまーに自分のホームページを観ていると嫌になる時があります。

2001/06/13 今どきの伝え方がある身近なものの中にある

2001/06/17 沖縄はみんなコンビニのような本屋ばかりです。何処へ

2001/07/16 精神の不安感は制作者には不可欠で大切なもの

2001/08/09 小説を書こうとしたのは、三度くらいありますが、いずれも途中で挫折しました。

2001/09/10 急がないとまにあわない、そんな感じがします。

2001/09/12 それを TV で目撃した。2001/09/11

21:00 頃、・・・新しい時代の新しい戦争。確かに敵はいるが『敵』が見えない。敵は『闇』の彼方。

2001/10/10 『神の手』がヒトの背中に触れているような恐ろしさを感じます。

2001/11/09 またまた、チョンボ!!!。運転免許証の期限を切らしてしまいました。これで2度目です。

2001/11/12 沖縄で這いつくばつて頑張つてもおそらく徒勞です。言い過ぎでしょうか!

2001/11/17 死ぬ事と貧乏になる事、どちらが恐いですか。アートはその両方を背負つて行かないと達成できません、と思います。

2001/12/21 いま、何かを描くとき、描きたいとき、同時に世界的な視点から最もシンプルに端的にかくことが大切だと思つてます。

2002/03/27 アーティストはお互いに貶(けな)し合つていてばかりでは、良い歴史は作れません。

2002/07/08 『月下美人』何方が命名したのか、素敵な名前です。夜中にタバコをきらして買いに行く途中に映っていました。

2002/09/08 時間とチャンスが、日常の壁の向こうで消えて行く。

2002/10/01 身体と眼はあたりを浮遊している感じです。

2002/10/16 拉致された5人、帰る。

2002/10/31 「救う会」の会見は何時でも感動的です。不幸で人間を鍛えたのでしょうか。

2002/11/28 「妹」の愛で「寅さん」は生きてくる。「ロッキー」があんなに戦えるのは「エイドリアン」を愛していたからだ。

2003/03/03 そろそろ健康について真剣に考え実践しないといけないようです。

2003/03/30 世界から・美しいもの・が消えそうです。

2003/05/01 ~ 30 一月間は体長不良で休みました。お許しください。

そして最後の「MEMO」

2003/06/23

「梅雨」は明けました。晴れたら良いですね。

※ <http://www1.linkclub.or.jp/~g-107/>

(または google で tonagen と検索)

が元俊さんのホームページです。

(きんじょう みつる・美術家)

## 「渡名喜元俊展」に寄せて

真久田 巧

本題に入る前にまずは画廊沖縄の復活、新しい船出を祝福したいと思う。前島小学校前の児童公園脇で産声をあげ、表通りともいえる泉崎に進出、さらに新都心へと発展的に移転、活動してきたはずだが、画廊主の体調不良には勝てず、閉店。これで、県美術界に大きな足跡を残した民間画廊も終わりかと寂しい思いをしていたが、不屈の闘志は健在だった。折に触れ、活動再開を目指す意思をはがきで確認はしていたが、実際に建物の建設工事が始まると改めて驚かされた。不肖、サラリーマンの感覚からすると一線からの引退を考えてもおおしくない年齢である。経済的負担、精神的重荷を押し量るとそのエネルギーの強さ、大きさに敬服せざるを得ない。完成した展示空間に足を踏み入れて感想を求められたとき、この南風原と大里の境目、田園地帯（田舎）というロケーションと画廊の標榜する現代美術の世界とのギャップに「めまいを覚えるような感覚」と答えたものである。それはまた、ここがいずれ名所になる日も近いとの想像と期待をも含めてのことである。

その復活なった画廊沖縄が柿落としに企画したのが世界の現代美術の巨匠、フランク・ステラで第二弾が今度の「渡名喜元俊展」である。そこに画廊の思い、今後の方向性が示されているようにも思う。

筆者が渡名喜元俊という人間存在を知ったのは、新聞社で美術担当として働き始めてからのこと。でも、その出会いがどうであったのか。記憶はさだかでない。気が付けば、いつの間にか旧知の人のように会話を交わしていたというのが正直なところなのだ。美術家としての渡名喜をしっかりと意識したのは、その展評を書こうと思ったとき。事前に新聞資料に目を通して、「アトリエ訪問」という連載で取り上げられている渡名喜の記事が目についた。ベニヤ板のようなキャンバスに赤を基調にした画面全体に等間隔に描かれた円ばかりの作品だった。そこで記者の質問に答えて「宇宙との交流を試みている」といった内容のことをしゃべっているのである。正直、そのユニークさで一度に頭にインプットされたようだった。

渡名喜の地元、佐敷町富祖崎（当時）の砂州で「風化計画」という実験制作を取材したのは1992年。画廊などの建物のなかでの取材が多いなかで久々の野外展が見られるくらいの気持ちで出向いた。暑い日差しの下、砂浜に何本か打たれた杭によって固定された綿布があるだけだったが、それはすでに人間が捨てた文明のアカともいべき汚れが付着していた。まさにそのとき「地球との交流」というコンセプトが目の前に提示された気がした。そして「宇宙との交流」だってまんざら冗談でもないのではと思えてきたのである。作品は、しばらくして制作現場近くのギャラリーで展示されたあと那覇市民ギャラリーにお目見えしたときには実に雄弁に語りだしていた。

しばらく個展から離れていた渡名喜が楽しそうに話しかけてきたのは、それから二年後くらいか。北谷のハンビーでフリマ計画というのをやっているという。ひやかし半分で顔を出したら



1992年4月佐敷町富祖崎の「風化計画」（写真／渡名喜元俊HPより）

いわゆるハリガネアートの実演販売である。フリーマーケットを訪れる若者らとコミュニケーションをとりつつ、自分のアートの世界、アートを生み出す人間的価値がどれほどのものなのかを確かめている様子だった。そしてそれはなにより「アートとは何か」という彼自身の根源的な問いでもあったはずである。美術館や画廊といった既成の空間を飛び出して鑑賞者との接点を自分の側から探る。このことは実は筆者自身の美術記者としての仕事にも通底するものだった。担当になったとき、最初に考えたのは「このアートと大衆との間にある超え難き壁を取り払いたい」ということだった。そのためには作家が評者を指定して展評を書かせ、新聞が単なる媒介者にすぎないという現状を何とか打破しなければならぬという思いだった。結果、取った手法は外部に評者を頼まず、記者として自分自身で書くということだった。筆者が渡名喜という美術家と交流がもてたのもそうした美術記者の主体性を求めたからこそだと思う。彼は、いわゆる全共闘世代である。寺山修司、吉本隆明に傾倒しポップアートの旗手アンディ・ウォーホルを標榜した。今度、この原稿を依頼された際、画廊主の上原誠勇さんから送ってもらった略歴によると学生時代には演劇にも手を染めていたようだ。パフォーマンス好きな性格は、そのあたりに根があったのか。若いアーティストたちのなかに積極的に入り込んでいくあたりはポップな感覚なのだろう。天下国家、思想を大真面目に論じながら、どこかにウチナンチュの恥じらい、シャイな一面を隠せないでいる。道半ばで人生を駆け抜けていった渡名喜がめざした世界はどんなものだったのか。今度の展覧会に手がかりがあるに違いない。

（まくた さとし・新聞記者）

## 「急逝した現代美術家―渡名喜元俊」

花城 勉

渡名喜元俊が急逝してから3年近くの歳月が流れようとしているが、その表現の方向性や意味性、検証について議論する機会があまりにも少なかったのではないだろうか。ここでは、渡名喜との交流が深まった1994年以降の活動を振り返り述べてみたい。

その当時は、風化計画という壮大なプロジェクトを渡名喜自身の中で終止符を打った転換期（1996年）ともいえる頃であった。

まず、「北谷ハンビーナイトフリマ作戦」（1996年3月～99年5月）と題しワイヤーワークをフリーマーケット内にて展開し、更にはノマド的に国際通りや人々が行き交う場所や路上に移動して展示する「サーキット計画」（2000年5月～7月）を展開させた。代表的な2つの展開の特徴の一つとして、ノイズを求めて街に出るといったコンセプトがある以前行った、海辺で布地をさらし浮遊物などの自然をノイズとして定着させた「風化計画」（1992年～95）に根底の部分で共通することは興味深く、「フリマ作戦」につながる布石だったといえるだろう。

おそらく渡名喜は、海岸という屋外での空気を感じることにより、それ以前に展開した「呼吸」（1987年～89）や「BORING」（1989年～90）、「極東」（1991年）などに見られるミニマルやホワイトキューブという固定的な在り方から、ワイヤーワークと屋台という移動可能でフットワークの軽い表現形態に活路を見出したのである。

ワイヤーを携えて多くの人々の視点や面前に立ち、ワイヤーワークの場を「現場」と語った。精巧とは言えないその無骨なワイヤーの造形物は、おそらく作品の完成度よりも、ワイヤーをつないでいくという行為に価値を置いたものであり、その造形は人と人とが繋がっていくことを意味し、渡名喜自身のコミュニケーションの在り方を具現化するものであった。

その急変ともいえる展開は、実験性やハイアートという美術内領域での解釈や難解な美術という壁を越えて、人々と直接対峙していくスタンスを選択することにより、これまでの表現形態を否定し、新たな美術の在り方を提起するものとするものであった。

その後、インターネットでのホームページ「Open House」を開設（2000年7月～）させ、更にコミュニケーションの深度を図る為の手立てを試みた。

以下は、当時の心境をつづった渡名喜氏からのメール（2000年12月）である。

「いよいよ新しい世紀を向かえます。いろいろな意味で情況を変革しないと今のままでは沖縄（ボク）の芸術は出口が見えません。いろいろ

なものをフラットにする必要性を感じます。インターネットのファイルはどんなに有名な人のファイルでもリンクを張れば全てがフラットだから素晴らしいと思いませんか。特に「時代の感性」を勝負する芸術は「時代とリンク」することと、ある意味では「仁義なき戦い」が大事だと思います。戦い得なくなったときに、権威とか、画暦とか、名誉とか、お金とか（お金は大事ですが）余計なものが付いてくるのだとおもいます。一番の敵は「自」ですが、戦う「友」は大事だと、最近、感じています。アートをもっと簡単に身近かなものでストレートに表現できないかと思います。」

という内容に渡名喜の目指したことと実践が凝縮され、これまでの美術状況に対して真正面から取り組む姿勢と態度が読み取れる。そのモチベーションは、渡名喜の純粋性からくる正義感だったのではないだろうか。



2001年7月「Robot gt-001」（渡名喜元俊HPより）

そして、遺作となった「Robot gt-001」（2001年7月）では、段ボールで造形された無垢なロボットに明るい未来像を託したことは、これまでの変遷を辿ると象徴的であり示唆的である。

「アートは最良のソフトである」という言葉を繰り返し用い、美術と社会とのコミュニケーションを先進的に押し進め、閉鎖的な美術状況に対する果敢な挑戦

と、その格闘する行為や姿勢に渡名喜の美学を感じたのである。

混沌の時代だからこそ、渡名喜の美術への熱い眼差における精神性と純粋性は鮮やかにこれからも照射され続けるだろう。

（はなしろ つとむ・美術家）

## 「悲しいほどに美しいもの」

上原誠勇

ハイテクのパソコンとロウテクのワイヤーアートの両極を往来しながら、「悲しいほどに美しい物を創りたい、...」と常々口にしていた晩年の渡名喜元俊。彼が亡くなって3年近くが経った。96年以降パソコンを手に入れ、ハンビーフリーマーケットでワイヤーアートをするようになってから、画廊に顔を見せるのは年に1・2度ほどになっていた。何かにつけて気になる元俊氏の美術活動、連絡はメールのやり取りがほとんどだった。2002年の12月、久しぶりに新都心の移転したばかりの画廊へ訪ねてきた。「メール連絡ありがとう」ピリットした背広姿で現れ、HPの話や今後の芸術活動の動向について熱く語り盛り上がった。「来年(2003年)はいい作品を造るから、個展をさせてくれよ」「いつでも待ってるから連絡してくれ」と返事した。久しぶりの美術談の後、画廊の螺旋階段を下りて行く後ろ姿と、意欲に満ちた彼の力強い言葉が印象に残った。しかし、それが最後だったとは想いもよらなかった。

さて、元俊氏の濃縮された15年間の美術活動はどうだったのだろうか。元俊氏は2度大学を卒業している。1度目は75年琉球大学保健学部、2度目は81年琉球大学美術工芸科である。先日、元俊のご両親を訪ねた。父親の元勇さんは「元俊は小さいときから山から取ってきた石で彫刻のようなものをよく作っていた。美術が好きだったんでしょ」と美術家になることが自然と受け止めていた様子であった。

元俊の本格的な美術活動の開始は87年の「呼吸」シリーズからと言ってよいだろう。大学卒業後、美術教師に就くのが数年で辞めてしまう。生まれ故郷の佐敷町の伊原に10坪程のプレハブ作りのアトリエを構える。88年の4月だったと記憶している。彼のアトリエに案内された。かなり丁寧に整理された空間であった。その中にガラス箱の蝶の標本があった。「以前は蛙や鮒やイモリなどが畑の周辺にいっぱいいた。今では農薬であまり見られなくなった、淋しいことだよ。採集した蝶の羽を指しながら「彼らのような生命感のある強烈な模様は人間のDNAには出来ない、しかしボクはこのメカニズムを絵画にしたい」と言った。私は興味深く受け止め、床に敷かれた大きな綿布の支持体にドットが反復するミニマルな作品に見とれていた。以後、彼は支持体を綿布から強固な木板に変え「Boring」シリーズを展開している。

この一連のミニマルリズムの「呼吸」と「Boring」の作品は彼にとって余程自信作だったに違いない。ミニマルのドットをベースに限りなく反復をくり返し、生命の鼓動のように刻印されている。無垢な作業から生まれた「呼吸」シリーズ、生命の尊さが薄れ行く現在、それらの作品群は生命の「尊厳性」を帯び、ドットの画面がこちらに向い迫って来るように輝いている。

89年10月、「呼吸」シリーズの図柄綿布でスーツのデザインをして、縫子に仕立てさせ、それを着用してパリとニューヨークの旅に出た、元俊41才の出来事である。同行した私には、草間彌生の気迫に満ちた世界に映った。ニューヨークのOKハリス画廊に作品を持ち込んだ元俊氏、画廊主から「NO NEED」と言われ、かなりショックを受けたようだ。その後、納得がいかなかったのか、90年3月東京で個展を開き、当時活躍の美術評論家の峰村敏明氏を訪ねている。峰村氏から何らかの示唆を受けたに違いない、以後、ミニマルなベースを残しながら「社会性」「場所性」を重要視し、コンセプトを修正している。その後、米軍基地沖縄を刻印した迷彩色(カムフラージュ)「極東」シリーズが誕生する。現在も変わらぬ軍事植民地オキナワ。極東最大の米軍基地を置くオキナワ、迷彩色に覆われた島-オキナワ。ミニマルドットをベースに「極東」=巨大軍事基地=オキナワとして、弱者沖縄の歴史宿命を屈辱感と自覚を込めて全ての作品を迷彩色で描いている。

92年、元俊は環境や現代文明に批判的な厳しい眼を向ける。古里(佐敷町富祖崎)の海岸で「風化計画」をスタートする。文明の反動としてのゴミ、毎年加速度的に汚染

される河川や海、エコロジカルなテーマと「反文明」「人間のおごりへの反感など」が融合し、現代文明のノイズ、現代人の精神のノイズ、自然宇宙ゴミのノイズを河川や海辺に長期間ミニマルドットの綿布キャンバスを浸し、環境状況をオートマチズムに染め捕らえた。現在でも新鮮で明確なコンセプトは秀逸な作品である。団塊世代の象徴とも言える「反体制」と「反芸術」の批判精神は「社会性」を全面に表出したコンセプチュアル作品「風化計画」に見事に結実させたと言えよう。元俊はゴミの散乱した干潟と「風化計画」の進行を4本のビデオに克明に記録している。

その後元俊の内部に何が起きたのだろうか、「風化計画」をなぜ中断したのだろうか。何かに失望したのだろうか。元俊からその答えを訊くチャンスは逃した。私の勝手な推測だが、彼の美術活動コンセプトを支えきれなかった沖縄の美術評論界の現実があり、沖縄美術界に失望したと想えてならない。私の知るところ、92年に始まる「風化計画」は95年まで続けられ、その間、元俊は5回の個展を開いている。展評らしい記事は見あたらない。沖縄タイムスの真久田記者が92年に現地取材して「展覧会から」の欄で取り上げただけに過ぎない。かつて元俊は度々口にした「沖縄の美術界は人生をかけるほど本気でやってないよ!」状況への不満と憤りを抑えなかった。



「INNOCENT EYE-97」

96年突如として元俊はワイヤーアートの作品を創って「北谷ハンビーナイトフリマ作戦」を展開する。路上のフリーマーケットで自作品とお客とのコミュニケーションを大事にした。ある時見せてもらった彼の手指は厳しい労働者のように分厚く、堅い血まめだらけだった。10数年前の「反芸術」「非造形」「芸術は戦いだ」を叫んだ若き現代美術家が純粋無垢な手業に必然にしてたどり着いた「位置」だったのだろうか。2000年の夏の夜、友人と国際通りを歩いたことがあった。路上でワイヤー作品販売してる渡名喜元俊、52才の姿を見た。「売れてますか」と声をかけたら「よく売れるよ生活はできるさー」と返した。しかし長くは続かなかった。その年ホームページを立ち上げ、約15年間燃焼し続けた芸術活動の内容を自ら明らかにした。2001年にはダンボールでロボットを作り、その心臓部にコンピュータを置き、自己とロボットを置き換え「悲しく美しい自己像」を客観視し、空虚な自己を投影して見せた。「Robots gt-002」が最後の作品となった。彼が残した自作のホームページ「OPEN HOUSE」をぜひ訪問して欲しい。芸術家-渡名喜元俊の魂の叫びは「INNOCENT EYE」(純粋で無垢な眼差し)だったかもしれない。私の友人であり、惜しい美術家を亡くした寂しさは隠せない。

(うへはら せいゆう・画廊主)

